

堀 辰 雄 の 表 現

——病を面影としての生を描く——

瀬 古 確

—

堀辰雄の文学には死を裏打としての生、病を同伴者としての親しげな交渉を通じて、その敘述の行われているものが殆んどである。

聖家族の冒頭に

死があたかも一つの季節を開いたかのやうだった。

と言っているばかりでなく、最後の章に「扁理の出発後」に「病氣になって」しまった絹子が、

「河野さんは死ぬんぢやなくって？」

と「出しぬけに質問」したのに対して、細木夫人の「その瞬間」そして「次の瞬間」の心理を極めて詳細に描いた後——質問にすぐ答えないで長々と「その瞬間」と「次の瞬間」との心の動きを写しているのなどは、後述の如く彼の表現の長文とならずにおかない一証であるが、——やっとその答として

「……………そんなことはないことよ……………それはあの方には九鬼さんが憑いてゐなさるかも知れないわ。けれども、そのために反ってあの方は救はれるのぢやなくって？」

と言っているのはその一例と言ふべきである。

「風立ちぬ」が彼の許婚の節子と連れ立って、八ヶ嶽の麓のサナトリウムに於ける死を裏打とした生の喜びを描いたものであることはもとよりであるが、

私達のいくぶん死の味のする生の幸福はその時一そう完全に保たれた程だった。

と作者自ら物語っている所にも又明かである。

更に「風立ちぬ」の中でも、「死のかげの谷」なる十二月一日から十二月三十日まで亘る、日記風な手記の中にも、「死」の影は後を長く曳いているのであるが、そこに物語られているのは

昔、お前とよく絵を描きにいった、真ん中に一本の白樺のくつきりと立った原へも行って

みても、蘇って来なかった節子が、一気に谷を昇って、小屋に戻って来て、はあはあ息を切らしながら、ヴェランダの床板に腰を下ろしていると、

そのとき不意とそんなむしやくしやした私に寄り添ってくるお前が感じられた。が、私はそれにも知らん顔をして、ぼんやりと頬杖をついてゐた。その癖、さういふお前をこれまでになく生き生きと——まるでお前の手が私の肩にさはってゐはしまいかと思はれる位、生き生きと感じながら……………

の如く、まるで生きた「節子」を「私」はひしひしとその身に感覚として捉えているのである。しかも「この意気地なし」の自分のたった一人で暮らしておられるのも、「本当にみんなお前のお蔭」であり、「お前はおれには何にも求めずに、おれを愛していて呉れたのだろうか？……………」とさえ言っている。そしてはじめには「死の谷」としか思わなかった所も、「住みなれてしまえば」、人々と一しょになって、「幸福の谷」と呼ぶことのできるほどになって

しまっている。

又作者自ら「生れてはじめて本当に小説らしい小説を書いたような気がする」と言う「菜穂子」は彼女と夫とか姑とか、半病人の幼馴染、都筑明等を配したものであり、彼女の療養生活を中心として描いたものである。更にその間に点綴される〇村の宿のおえふの娘初枝までが、東京の医者の治療の受けても、容易に治らない難病である。「菜穂子」はまるで病人ばかりを登場させていながら、さして病に打ちひしがれた沈鬱な空気ばかりではないのである。

健康な時にはろくにしんみりと話すこともなかった菜穂子と夫との出合が風雨のサナトリウムで行われるのであるが、それは今まで母とばかりの生活の習慣から、とかく菜穂子を圏外に置きがちであった事の夫の後悔によるものであった。

その後は夫の圭介の心にも、菜穂子のいる山の療養所のことやしきりに思いやられるようになった。

或野分立った日、圭介は荻窪の知人の葬式に出向いた帰り途、駅で電車を待ちながら、夕日のあたたつたプラットホームを一人で行ったり来たりしていた。その時突然、中央線の長い列車が一陣の風と共にプラットホームに散らばっていた無数の落葉を舞い立たせながら、圭介の前を疾走して行った。圭介はそれが松本行の列車であることに漸々と気がついた。彼はその長い列が通り過ぎてしまった跡も、いつまでも舞い立っている落葉の中に、何か痛いような眼つきをしてその列車の去つた方向を見送つてゐた。それが数時間の後には、信州へはひり、菜穂子のある療養所の近くを今と同じやうな速力で通過することを思ひ描きながら……………

このようにして「思ひかけず」妻の存在を「まざまざと全身で感ぜられ」てからは、圭介はプラットホームで夕方信州に向ふ列車の通過を待つことが多くなつた。

雪の烈しく降り続いたある日、菜穂子は急に療養所を抜け出して、新宿行きの列車に乗つてしまつた。三等車の中にも、銀座裏のジャアマン・ベエカリーの一隅にも、「生の匂」の立ち込めているのを彼の女は見逃す事はできな

作者は菜穂子と圭介の思いがけない出会に当つて、菜穂子の希望通り、

もう二三日此のホテルにこの儘居ないか。さうして誰にも分らないやうにこつそり暮らさう。……………と圭介の口からは言わせなかつたにもせよ、圭介の雪を掻き分けながら帰るのを、玄関まで見送つた菜穂子は、ぼんやり暮方の雪景色を眺めながら、今の自分の心の内と関係があるのだからだかかわからないような事を、それからそれへと思ひ出しているのであるが、今日のやうな夢中になつて手あたりばつたりした事から、「何か新しい人生の道」が指示されているようにも思ふのである。

そこにはたとえ明日歸つて行かねばならない山の療養所のあの「吸ひつくやうな寒さ」が予定されているのにも拘らず、案外死の影と言つたものは見届けられないのであり、寧ろ病を友とする作者の温かい筆致をさえ思わせるものがある。

春

風立ちぬ

冬

死のかげの谷

の如く四部から成つており、序曲の最初に

それは夏の日々、一面に薄の生ひ茂つた草原の中で、お前が立つたまま熱心に絵を描いてゐると、私はいつもその傍らの一本の白樺の木蔭に身を横たへてゐたものだつた。さうして夕方になつて、お前が仕事をすませて私のそばに來ると、それからしばらく私達は肩に手をかけ合つたまま、遙か彼方の緑だけ茜色を帯びた入道雲のむくむくした塊りに覆はれてゐる地平線の方を眺めやつてゐたものだつた。やうやく暮れようとしかけてゐるその地平線かち、反対に何物かが生れて來つつあるかのやうに……………

と言つてゐる所から、或いは

秋は林の中を見ちがへるばかりに乱雑にしてゐた。葉のだいぶ少くなつた木々は、その間から人けの絶えた別荘のテラスをずっと前方にのり出させてゐた。菌類の湿つばい匂ひが落葉の匂ひに入りまじつてゐた。さういふ思ひがけない位の季節の推移が——お前と別れてから私の知らぬ間にこんなにも立つてしまつた時間といふものが私には異様に感じられた。私の心の裡の何処かしらに、お前から引き離されてゐるのはただ一時的だと云つた確信のやうなものがあつて、そのためかうした時間の推移までが、私には今までとは全然異つた意味を持つやうになり出したのであらうか？……………そんなやうなことを、私はすぐあとではつきりと確かめるまで、何やらぼんやりと感じ出してゐた。

と言つた具合に、作中人物の心は自然の風物によつて触発されるのである。それは第一部の「春」にはもとより、第二部の「風たちぬ」にも、第三部の「冬」にも、第四部の日記風の手紙「死のかげの谷」に於いてさえも、変る所はないのである。たとえば第四部の十月十八日の所を見ると、

漸く雪が歇んだので、私はかういふ時だとばかり、まだ行つたことのない裏の林を、奥へ奥へとはひつて行つて見た。ときどき何処かの木からどおつと音を立ててひとりでに崩れる雪の飛沫を飛びながら、私はさも面白さう

に林から林へと抜けて行つた。勿論、誰もまだ歩いた跡なんぞはなく、唯、ところどころに兎がそこいら中を跳ねまはつたらしい跡が一めんに附いてゐるきりだつた。又、どうかすると雉子の足跡のやうなものがすうつと道を横切つてゐた……………

と言つた風に、雪の中の兎や雉子の足跡にまで打興じているのである。

或いは「かげろふの日記」にも、

山陰の暗いところを螢が小さく光りながら飛ぶのがしきりに見えた。里でまだしも物思ひの少なかつた頃には、ついぞ二声と続けて聞いたことのないのを怨めしがつた時鳥も、いまはすっかり私にも打ち解けて、殆ど絶え間もなしに啼いていた。水鶏だつて、わが家の戸を叩いたかと思うくらい近くを啼いてゆく。——それにしても、何んとまあ物思ひ自身の巣くつてゐるやうな栖なのだらうかしら。

の如く自然描写から直ちに物思ひの栖になつてゐる自らを描くことへと、転じて行つてゐるのである。更に

ここ数年といふもの、私はおほく信濃の山村に滞在して、冬もそこで雪に埋れながら越すやうな事さへあつた。それらの日日は、私のもつて生れたどうにもならぬ遙かなものへの夢を、或は其処の山山に、或は牧場に、或はまた樺や樅などの木木から小さな雑草にまで寄せながら、自分で自分にきびしく課した人生を生きんと試みてゐた日日にほかならなかつた。私はある晩秋の日日、そこで「かげろふの日記」を書いてゐた。(嬢捨記)

天平時代の遺物だといふ転害門から、まず歩き出して、法蓮といふちよつと古めかしい部落を過ぎ、僕はさもない気もちさうに佐保路に向ひ出した。

此処、佐保山のほとりは、その昔、——ざつと千年もまへには、大伴氏などの多く邸宅を構へ、柳の並木なども植ゑられて、その下を往来するハイカラな貴公子たちに心ちのいい樹蔭をつくつてゐたこともあつたのださうだけれど、——いまは見わたすかぎり茫々とした田圃で、その中をまつ白い道が一直線に突つ切つてゐるつきり。

秋らしい口ざしを一ぱいに浴びながら西を向いて歩いてみると、背なか熱くなつてきて苦しい位で、僕は小説などゆつくりと考へてゐるどころではなかつた。漸つと法華寺村に著いた。(大和路)

などの例によつても、辰雄の作品に如何に多くの自然が採り入れられているかを覗うことができるであらう。

之を川端康成の作(註一)と比較すると、川端作品のように、之をセーブしたり、特にふんだんに用いるとか言つたことはないようである。

ただ自然の風物と作中人物の心持とは常に交錯していて、外国風、特にフランス好みの彼の作風——確かにそれはいたる所に見られるのであるが——の中にも著しいのであるがやはりそこには自然観照の伝統の継承せられているのを見逃しえないのである。

或いは彼の作に西欧的な近代風な軽井沢のスケッチから、時代から取り残された古い宿場跡の寒村信濃追分の物寂びた風景を好むようになったのは、彼の欧風趣味の漸く日本に回帰したものとする考もあるようであり、(註二)作品の配列から言えば、たしかにそんな一面もあるようであるが、彼の国文科出身であるのを思い、「更級」などには早くから心を引かれていたのを考えれば、たとえ一時はリルケなどに夢中になり、生涯を通じて海彼の文字に好んで親しんでいたとは言え、日本を忘れたコスモポリタンでなかつたことはもとより、晩年屢々古都を訪れ、そこを背景とした作品を試みようとしていた所に、彼の真面目を覗うべきであらう。

これまでは信濃の国だけありさへすればいいやうな氣のしてゐた僕は、いつしかまたすこしも知らない大和の国に切ないほど心を誘はれるやうになつて来ました。……………(古墳)

と言つている彼の言葉によつて明かなように、作者はやゝ陰鬱な信濃の高原の乾燥した風景から、大和と言う明るい暖かな古い歴史のいぶきの一木一草にも感ぜられるやうな日本的な心の風土を発見し、これを愛惜して止まなかつたのである。大和路・信濃路の読者にして一度も大和を訪ねたことのない人があるなら、必ず旅情をかき立てられずに

はおかないものがあるであろう。

次に堀辰雄の表現の特徴として色彩的・音響的と言うべき点、感覚描写に優れている所を挙げなければならない。例えば「風立ちぬ」に、「序曲」のあるばかりでなく、「風立ちぬ」の章の設けられているのはもとより、「序曲」のうちにも

風立ちぬ、いざ生きめやも。

なるベルレーヌの詩句のふと口を衝いて出て来たことを物語っているのであるが、「春」の章にあつても又
風立ちぬ、いざ生きめやも。

といふ詩句が、それきりずつと忘れてゐたのに、又ひよつくりと私達に蘇つてきたほどの、——云はば人生に先立つた、人生そのものよりかもつと生き生きと、もつと切ないまでに愉しい日々であつた。
の如く、之を繰返して記さずにはおられないのである。

「絶対安静の日々が続い」ても、二人の「風変りな愛の生活」がそこにあつた事は確かであり、たとえそれが死を裏打とした危うげなものであつたにもせよ、「生きめやも」と言つた作者の決意は全篇を一貫してゆらぐことがないのであり、そこに低音として常に楽しげな曲の奏でられるのは寧ろ当然と云うべきである。

又「今の私がそれならば書いても見たいと思ふもの」は「平凡」でも「花だらけの額縁の中」へ嵌まり込む「古い絵のやうな物語」であり、「言はば牧歌的なものが書きたかつた」と言つている所にも、彼の意図した物語なるものを想見できるであろう。「序曲」の中から思ひのまゝに拾つてみても、

○山鷺だの、閑古鳥だのの元氣よく囀ることといつたら！ すこし僕は考へごとがあるんだから黙つてゐてくれな
いかなあ、と癪癢を起したくなる位です。

○どこへ行つても野薔薇がまだ小さな硬い白い蕾をつけてゐます。その咲くのが待ち遠しくなりません。これがこれから咲き乱れて、いいにほひをさせて、それからそれが散るころ、やつと避暑客たちが入り込んでくることとせう。かういふ夏場だけ人の集つてくる高原の、その季節に先立つて花をさかせ、そしてその美しい花を誰にも見られずに散つて行つてしまふさまざまな花（たとへばこれから咲かうとする野薔薇もさうだし、どこへ行つても今を盛りに咲いてゐる躑躅もさうですが）——さういふ人馴れない、いかにも野生の花らしい花を、これから僕ひとりきりで思ふ存分に愛玩しようといふ気持は（何故なら村の人々はいま夏場の用意に忙しくて、そんな花などを見てはゐられませんから）何ともいへず爽やかで幸福です。

○縁側から見上げると、丁度、母屋の藤棚が真向ふに見え、今日あたりは、風もないのにぼたぼたと散りこぼれてゐます。その花に群がる蜜蜂といったら大したものです。ぶんぶんぶん唸つてゐます。——この手紙を書きながら、ちょっと筆を休めて。何を書かうかなと思つて、その藤の花を見上げながらぼんやりとしてゐると、なんだか自分の頭の中の混乱と、その蜜蜂のうなりとが、ごつちやになつて、そのぶんぶんいつてゐるのが自分の頭の中ではないかしら、とそんな気がして来る位です。

の如く如何に色彩的・音響的な匂いに包まれているかに気付くであらう。

又堀辰雄の表現には他の作家と違つて、屢々日記とか書簡の形式を採用することによつて、表現に変化の襲を多くしているのも、その著しい特色と言えるであらう。例えば「風立ちぬ」にあつて、「序曲」は前掲の文章で始り、次の「春」では

三月になつた。或る午後、私がいつものやうにぶらつと散歩のついでにちよつと立寄つたとても云つた風に節子
の家を訪れると、門をはひつたすぐ横の植込みの中に、労働者のかぶるやうな大きな麦稈帽をかぶつた父が、片
手に鋏をもちながら、そこいらの木の手入れをしてゐた。

と記し、第三の「風立ちぬ」も

私達の乗った汽車が、何度となく山を攀ちのぼつたり、深い溪谷に沿つて走つたり、又それから急に打ち展けた葡萄畑の多い台地を長いことかかつて横切つたりしたのち、漸つと山岳地帯へと果てしのないやうな、執拗な登攀をつづけ出した頃には、空は一層低くなり、いままではただ一面に鎖ざしてゐるやうに見えた真黒な雲が、いつの間にか離れ離れになつて動き出し、それらが私達の目の上にまで圧しかぶさるやうであつた。

と言つた具合である。所がその次の章の「冬」にあつては

一九三五年十月二十日

午後、いつものやうに病人を残して、私はサナトリウムを離れると、収穫に忙しい農夫等の立ち働いてゐる田畑の間を抜けながら、雑木山を越えて、その山の窪みにある人けの絶えた狭い村に下りた後、小さな谿流にかつた吊橋を渡つて、その対岸にある栗の木が多い低い山へ攀ちのぼり、その上方の斜面に腰を下ろした。

の如く日記風に之を記し、十月二十三日、十一月二日、十一月十日と飛び飛びにつゞき、十二月五日に至つて、一応終つてゐるのであるが、更にその終章「死のかげの谷」でも

一九三六年十二月一日 K：村にて

殆んど三年半ぶりで見えるこの村は、もうすっかり雪に埋まつてゐた。

の如く日記形式はつゞき、二日・五日・七日・十日・十二日・十三日・日曜日・十四日・十七日・十八日・二十四日と断続的に書きつがれ、十二月三十日の所では

本当に静かな晩だ。私は今夜もこんなかんがへがひとりでに心に浮んで来るままにさせてゐた。

に始り、

……此処だけは、谷の向う側はあんなにも風がざわめいてゐるといふのに、本当に静かだこと。まあ、ときおり私の小屋のすぐ裏の方で何かが小さな音を軋らせてゐるやうだけれど、あれは恐らくそんな遠くからやつと

届いた風のために枯れ切った木の枝と枝とが触れ合つてゐるのだらう。又、どうかするとそんな風の余りらしいものが、私の足もとでも二つ三つの落葉を他の落葉の上にさらさらと弱い音を立てながら移してゐる。……

と終つてゐるのである。このように、日記の形式によつて、物語の中に新風を吹き込ませたのは、作者の工夫に成るものであり、更に「美しい村」の序曲の書簡の形をしているのと共に、形式美を誇つてゐるものと言えるであろう。

更に堀辰雄の表現には好んで長文が用いられ、そのために、風景の描写にしても、心情の吐露にあつても、曲折を極めて美しい、細かな襞をいくつもいくつもその作品に浮かび上らせる結果ともなつてゐる。例えばその「かげろふの日記」に

半生も過ぎてしまつて、もはやこの世に何んのなす事もなく生きながらえている自分だが、—— 一たい顔かたちだつて人並でないし、これと云つた才能もあるわけではないのだから、こんな風にはかない暮らしをしているのも尤もの事だとは思ふものの、只こうやつてぼんやりと明かし暮らしているがままに、世の中に多い物語などをおりおり取り上げて、その端などを読んで見ると、ずいぶん有り触れた空言さえ書いてあるようだから、自分の並々ならぬ身の上を日記につけて見たら、そんなものよりも反つて珍らしがつてくれる人もあるかも知れない。と言つた具合にどこまでも続いて行く。これは王朝の物語になつたものだから、そのスタイルを模するのにも又自然としても、（彼の王朝物語に取材しても、原作の部分より更に長い文をもっている事については後述の通り。）「菜穂子」に

一晩ちゆう何かに怯えたように眠れない夜を明かした末、翌日の午近く漸く雲が切れ、一面に濃い霧が拡がり出すのを見ると、ほつとしたやうな顔をして停車場へ急いで行つたが、又天候が一変して、汽車に乗り込んだか乗り込まない内にこんな嵐に遭遇してゐる夫の事を、菜穂子は別にさう気を揉みもしないで思ひやりながら、何時かまた窓硝子に描かれたやうにこびりついてゐる一枚の木の葉を何か気になるやうに見つめ出してゐた。

と言つてゐる所は、すべて一文で綴られており、

生れつき意中の人の幻影をあてもなく追ひながら町の中を一人でぶらついていたりする事の出来なかつた圭介は思ひかけずそのとき妻の存在が一瞬まざまざと感ぜられたものだから、それからは屢々会社の帰りの早いときなどには東京駅からわざわざ荻窪の駅まで省線で行き、信州に向ふ夕方の列車の通過するまでちつとプラットホームに待つてゐた。

の如きは

いつもの夕方の列車は、彼の足もとから無数の落葉を舞ひ立たせながら、一瞬にして通過し去つた。と比較的短い文を中間におき、再び

その間、彼が食ひ入るような眠つきで一台々々見送つてゐたそれらの客車と共に、彼の内から一日ぢゆう何か彼を息づまらせてゐたものが俄かに引き離され、何処ともなく運び去られるのを、彼は切ないほどはつきりと感ずるのだつた。

と長文がつづくのである。しかもこの三つの文章は行を改めることもなく、次々と続けられているので、一層切目のない長い感じを与えずにはおかないのである。

かかる長文の構成は自ら委細を尽すことのできる結果として、当然陰翳の多い心理の曲折を描くのに適しており、屢々女性的な表情を漂えている。

ここにも物語の永い伝統を思わせるものがあるのであるが、とかくその表現が長文となるのは、例えば牧場の真ん中ほどに一本大きな樹のぽつんと立っているのを認めても、之を遠くから眺めただけでは満足せず、「思ひ切つてそれに近づけるだけ近づいて行」き、之を確かめようとするためである。即ち

だんだん近づいて見ると、それは何んと云ふ木だか知らなかつたけれど、幹が二つに分かれて、一方の幹には青

い葉が簇がり出てゐるのに、他方の幹だけはいかにも苦しみ悶えてゐるやうな枝ぶりをしながらすっかり枯れてゐた。

と長い文で之を綴つても猶足らぬ氣に、

菜穂子は、形のいい葉が風に揺れて光つてゐる一方の梢と、痛々しいまでに枯れたもう一方の梢とを見比べながら、

「私もあんな風に生きてゐるのだわ、きつと、半分枯れた儘で……」と考へた。

の如く次の長文へと接しており、その継ぎ目にも氣付かせない程に改行さえ行われていないのである。

しかも長文の間に非常に短い文のぽつんと挟つてゐるのは、長文のとかく冗長となり易いのを引締めるのに効果がある。又単に省筆するとか、くどくどと再説しないなどの役目を果しているだけではなく、短文は又そこにフラッシュを当てるにも似た集約・強調の用になることもあるのである。

来る日も来る日も、雪曇りの曇つた日が続いてゐた。ときどき何処かの山からちらちらとそれらしい白いものが風に吹き飛ばされて来たりすると、いよいよ雪だなと患者達の云ひ合つてゐるのが聞えたが、それはそれつきりになつて、依然として空は曇つたままでゐた。吸ひつくやうな寒さだつた。こんな陰気な冬空の下を、いま頃明はあの旅びとらしくもない憔悴した姿で、見知らない村から村へと、恐らく彼の求めて来たものは未だ得られもせず（それが何か彼女にわからなかつたが）、どんな絶望の思ひをして歩いてゐるだろうと、菜穂子はそんな憑かれたやうな姿を考へれば考へるほど自分も何か人生に対する或決意をうながされながら、その幼馴染の上を心から思ひやつてゐるやうな事もあつた。（菜穂子、十九）

における傍線の部分の短文は、その前文とその後文との間にあつて、とかく冗漫となり易いのを防ぐ効果を立派に果しているばかりでなく、ここで一度文を集約した結果は、次の長文にあつて、しんみりと幼馴染の身の上を思いやつ

た敘述を一段と引き立たせてもいるのである。

猶堀辰雄の文章の長文構成となつていゝのを見ると、結局普通なら六つも五つもの切目が出る筈なのに、それを一々切らないで、助詞で転じたり、中止法を用いたりして長い長い曲折極まりないものに仕上げていゝのが見られるのである。例えば

彼が山の療養所を訪れてから、一月余になつて、社の用事などでいろいろと忙しい思ひをし、それから何もかも忘れ去るやうな秋らしい氣持のいい日が続き出してからも、まるで菜穂子を見舞つたのは、つい此の間の事のやうに、何もかもが記憶にはつきりとしてゐた。(菜穂子、十四)

を見て、七つの区切から成つており、そのうち二度は中止法であり、特に後の方の(それから何もかも忘れ去るやうな秋らしい氣持のいい日が続き出してからも)は長い副詞節で、「まるで菜穂子を見舞つたのは、つい此の間の事の事のやうに」と共に最後の「はつきりしてゐた」に掛かつて行つてゐる極めて息の長い構成である。しかも「一月余になつて」と「秋らしい氣持のいい日」の続き出した事は、「何もかも忘れ去る」に相応しい長い月日の経過であるに拘らず、「何もかも忘れ去る」所が、「何もかも記憶にはつきりしてゐた」と続くのであり、「何もかも記憶にはつきりしてゐた」と言う最後の結びは、又その前の「まるで菜穂子を見舞つたのはつい此の間の事のやうに」と言う副詞節によつて、丁寧に修飾し強化する事を作者は忘れていないのである。曲折を経た後の「忘れ去る」から、「記憶にはつきりしてゐた」主人公の心情は、ここに一入鮮かに浮彫せられる結果となつてゐるやうである。

或いは又次の長文も

彼女の心の内には、一瞬、けさ吹雪の中を療養所から抜け出して来た小さな冒険、雪にうづもれた山の停車場での突然の決心、三等車の中に立ちこめてゐた生のほひの彼女に与へた不思議な身慄ひ、——それらのものが一ときによみ返つた。(菜穂子、二十三)

にあつては、「冒険」「決心」「身慄ひ」を列挙すれば足りる所を、それぞれ「小さな冒険」「突然の決心」「不思議な身慄ひ」位の短い修飾では満足しきれず、「けさ吹雪の中を療養所から抜け出して来た」とか、「雪にうづもれた停車場での」とか、「三等車の中に立ちこめてゐた生のにほひの彼女に与へた」とかの長い限定を冠せなければならなかつた所に、この作者の表現のとかく長くなり易い秘密があるやうである。或いは

さうしてこんな風に、すべてのものから遠ざかりながら、そしてただ一つの死を自分の裏側にいきいきと、非常に遠く感じながら、この見知らない町の中を何の目的もなしに歩いてゐることが、扁理にはいつか何とも言へず
 快い休息のやうに思はれ出した。(聖家族)

の如くどこまでも切れることなく続いているのも、「……歩いてゐること」に、「……遠ざかりながら」と、「……感じながら」との相当長い二文が、次の「この見知らない町の中を何の目的もなしに」の長い文と共に流れ込んでいくことから成つてゐるためである。しかも最後の一文だけでも、「この見知らない町の中を」と「何の目的もなしに」と二重の限定のあるが上に、更に長文の二つを以つて之に重ねて、いよいよ主人公扁理の「何とも言へず快い休息のやうに」思い出さずにはおられない心境を浮かび上らせようと努めてゐるかに見えるのである。前に引いた菜穂子、(二十三)の文にあつても、「冒険」「決心」「身慄ひ」などの上に置かれた修飾は、それぞれ長短二つから成つてゐるのであるが、たとえば「冒険」の上の長い具体的な修飾は、「小さな」と言う抽象的な言葉によつて要約せられ、二つとも下の「冒険」へと掛かつて行つてゐるのが見られるのである。しかもこの場合の「小さな」は今まで長いやゝもすると冗長とも思われる修飾を、その具体的な敘述から一転して、短い抽象語によつて統括しているのであり、具体的と抽象的な長短二つの修飾の対照の妙を發揮したものと言えるであらう。

私の前に現われたその「蜻蛉日記」というのは、あの「ぼるとがる文」などで我々を打つものに似たものさえ持つているところの、——いわば、それが恋する女たちの永遠の姿でもあるかのように——愛せられることは出来ても自ら愛することを知らない男に執拗なほど愛を求めつづけ、その求むべからざるを身にしみて知るに及んではせめて自分がそのためにこれほど苦しめられたという事だけでも男に分からせようとし、それにも遂に絶望して自らの苦しみそのものの中に一種の慰藉を求めるに至る、不幸な女の日記です。

と作者自ら七つの手紙二の中に物語つていゝ「かげろふの日記」は、愛する男に愛するが故に反撥しながらも執拗にすがりつかずにはおられない王朝の一女性の複雑微妙な心の動きを描いたものであるが、辰雄の文章は切れようとして切れず、どこまでも曲節を極めてつづいて行き、しかもその中には——まで挟んで補足すると言つた、念の入れようであつて、ここにもよく作者堀辰雄の好みを自ら露呈しているのであるが、試みにその冒頭を掲げて、（私のこの文も、どうやら作者の魔杖に触れたらしい結果となつてしまつたが、）面白い傾向が発見出来るのである。即ち半生も過ぎてしまつて、もはやこの世に生きながらえている自分だが、——たい顔かたちだつて人並ではないしこれと云つた才能もあるわけではないのだから、こんな風にはかない暮らしをしているのも尤もの事だとは思ふものの、只こうやつてぼんやりと明かし暮らしているがままに、世の中に多い物語などをおりおり取り上げて、その端などを読んで見ると、ずいぶん有り触れた空言さえ書いてあるようだから、自分の並々ならぬ身の上を日記につけて見たら、そんなものよりも反つて珍らしがつてくれる人もあるかも知れない。それにまた、世間の人々が、私のようにこんなに不為合せになつたのは、あまりにも女として思い上つていたためであらうか、その例にもするがよいと思うのだ。

の如く、途中で一度も切れることなく、長々と「珍らしがつてくれる人もあるかも知れない」まで続くのである。しかも、そこで一旦切れるとは言つても、すぐ「それにまた」とつなぎの言葉を挟んで、又長い文章がつづくのである。

どこまで果るかも知れないと言つた女の繰り言を物語ろうとするにあたつては、いかにも相應しい発端と言ふべきであるが、ここで考え合せなければならないのは、蜻蛉日記の原文のそれである。上巻（註三）の巻頭は

かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで、世にふる人ありけり。かたちとても人にも似ず、心魂もあるにもあらで、かうもののようにもあらであるもことわりとおもひつつ、ただ臥し起き明かし暮らすまに、世の中におほかる古物語のはしなどを見れば、世に多かるそらごとだにあり。人にもあらぬ身の上まで書き日記して、珍らしきさまにもありなむ、天の下の人の品たかきやと問はむためしにもせよかしと覚ゆるも、過ぎにし年月ごろのこともおぼつかなかりければ、さてもありぬべきことなむ多かりける（上巻）

の如くであつて、後者の——線の箇所は、明かにそこで一応文が切れているのに、前者にあつては、二ヶ所共そこで切れることなく、下につづく文勢である。ここでは明らかに作者堀辰雄は原作者以上に、曲節に富んだ文を遣つていたのであつて、王朝の作者よりも、更に多くの細かな美しい襲の装いを整えつつ、女の複雑な心の些かな動きをも、見逃さず、連続的に把握しようとしている姿を認めずにはおられないのである。或いはそれから少し後の

それからまだ二た月とは立たないうちに、私はいつのまにやら只一人で起き伏しする事の多いような身の上になりながら、姉の方へばかり絶えずいまひと方が出這入りなすつていられるのを、胸をしめつけられるような氣もちで見て暮らしていたころ、五月になると、そのお方さえも、まるでそう云う私をお避けなさりでもするかのように、余所へ私の姉をお連れして往つてしまった。——が、こう云うはかない身の上になつたのは、私ばかりではなく、私なんぞよりずっと前からあの方がお通いになつて、お子様などもたんとおありなさると云うお方のもともへも、この頃は全くあの方は絶えられているとお聞きして、ましてどんなに心細い事だらうかと、おりおり消息などをさし上げては自分でもわずかに氣を紛らわせようとしていた。

にも、一応途中の「お連れして往つてしまった。」で切れたかと思うと、——で次に連接することを示し、はじめて

ここで一呼吸入れ、「が」を上の方のチェーンとして、再び長文をものしては、自らの身の上から、更に子どもまでも多くかゝえながら、一向に「あの方」の絶えて訪れることもないと聞く、心細げな他の人の身の上をも、思いやると言う具合である。この所を原文では

この今ひとかたの出で入りするを見つつあるに、今は心安かるべきところへとて率^あて渡す。
と記し、又他の所で

子供あまたありと聞くところもむげに絶えぬと聞く。あはれましていかばかりと思ひてとぶらふ。

と述べているあたりである。原文の方が寧ろ短い文によつて、テンポが早いようであるのに、辰雄の文章は何と起伏多く曲折ある敘述であらうか。彼が物語文によつて影響を受けたと言うよりも、作中人物の複雑微妙な心の動きを逃さず把握しようとした作者の工夫に成るものと言うべきである。又原文に

かくて絶えるほど、わが家はうちよりあまりまかづる道にしもあるれば、夜中暁とうちしはぶきてうちわたるも、聞かじと思へども、うち解けたるいもねられず。夜長うしてねぶることなければ、さななりと見聞く心地はなにかは似たる。

とあるあたりを、辰雄はやはり

そんな風に、あの方がますます私からお離れがちになつていられる間も、私の家は丁度あの方が内裏から御退出になる道すじにあたつていたので、夜更けなどに屢あの方が私の家の前をお通りすぎなさるらしいのが、折から秋の長い夜々のこととて、ともすれば私は目覚めがちなものだから、いくら聞くまいと思つていても、手にとるように耳にはいつてくる事がある。そんな時などには「何とかしてあれだけは聞かず^{しわぶき}にいたいものだが——」と思ひながら、しかもその一方では、いまして私の家の前をつづきさまに咳^{しわぶき}をなさりながらお通りすぎになつたあの方が、だんだんその咳と共に遠のいて往かれるのを、何処までも追うようにして、私は我知らず耳を側立

てているのだつた。……………

の如く縷々として描かずにはおかないのである。原作のたとえ現在の形を取りながらも、とかく抽象的に時間の瀟過を通しての思い出による短文の表現となつているのに対して、辰雄の作では原作に「夜中・暁」とあるのに、「夜更け」と焦点をはつきりさせ、「聞かじと思へども」「見聞く心地」と抽象的・集約的に述べた所を、「手に取るように耳に入つてくる」と、具体的に描く事をわすれず、更に「何とかしてあれだけは聞かずにいたものだが——」と心に思うことも、まるで口に出してもしたかの如く、はつきりと記しているのなどは、いかにもその時の原作者の心の動きを直接読者に伝えずにはおかない力強い表現効果を發揮することとなつたのである。しかも原作の咳を巧みに利用して、思うあの方の遠のいて往かれるのを「だんだん咳と共に」と描いている所には、又よく一方では耳をふさぎたい思いと、他方ではせめて咳の音をでも、「耳を側立てて」「何処までも追」わずにはおられないあやしい女心の動きをまで伝えて余す所がないのである。その上最後の……………も、「咳と共に」だんだん遠ざかつて消えて行かうとするあの方の余韻をどこまでも追つていような模様である。こゝにも作者堀辰雄の原作を踏まえながら、原作を越えようとする姿が、よく現わされているのである。

更に「姨捨」にあつても又

古い池のほとりにある、大きな藤は、春ごとに花を咲かせたり散らしたりした。そのたびに、少女は乳母の亡くなつたのはこの頃だと悲しく思い出し、又同じ頃亡くなつた侍従大納言の姫君の手跡を取り出しては、一人であわれがつたりしていた。そんな五月の或る夜、夜ふけまで姉と二人して物語など見ながら起きていると、少女の身ぢかに、猫の泣きごえらしいものが出し抜けにした。驚いて見ると、かわいい小猫が、どこから来たのか、少女の側に來ていた。前にいた姉が「誰にも教へないで、私達だけで飼いましようよ」と云つて、傍に寝かせてやると、おとなしく寝た。もとの飼主がそれを捜して、見つかりでもするといけないと思つて、二人だけでこ

つそりとそれを飼つてやつていると、猫はもう婢^{はしため}たちの方へは寄りつきもせず、いつも二人にばかり絡みついていて物もきたなげなのは顔をそむけて食べようとしなかつた。(姨捨一)

と言つては、更科日記の侍従の大納言の御女^{むすめ}の生まれ代りとか言うかわいい猫のことを記しているのであるが、ここでは原文に甚だ忠実で、ただ日記の著者を「少女」と第三者風に呼んでいるのが違う位である。所が姉君が病氣中ふと目をさまして、原作では

「いづら、猫は。こちゐてこ」とあるを、「なぜ」と問へば、「ゆめに、この猫の、かたはらに来て、おのれは侍従の大納言殿の御女のかくなりたるなり。さるべき縁のいささかありて、この、中の君の、すずろにあはれと思ひいで給へば、ただしばしここにあるを、このごろ、げすの中にありて、いみじうわびしきこと。といひて、いみじうなくさまは、あてにをかしげなる人と見えて、うちおどろきたれば、この猫のこゑにてありつるがあらなるなり」とかたり給ふを聞くに、いみじくあはれなり。そののちは、この猫を北面にもいささず、思ひかしづく。(註四)

と言つてゐる段になると、大体を原文に即しながら

「猫はどこにいるの。こつちへよこしておくれ」と云うので「どうかなすつて」と少女が云うと、姉はいましたが見た夢を話した。なんでもその猫が寝ている姉の傍らに来て、こんな事を言つたのだそうだった。

の如く原文の「ゆめに、この猫の、かたはらに来て」と言う簡結な姉の夢語りの言葉を取つて地の文に廻し、「姉はいましたが見た夢を話した」と言つたただけではなく、更に「なんでもその猫が寝ている姉の傍らに来て、こんな事を言つたのだそうだった」と念を押した後、猫の言葉は原文の如く姉を通してではなく、「実はわたくしは侍従の大納言殿の姫君の生れ変りなのでございます」と猫の直接物語つたまゝを写すと言う手法を採用しているのである、ここでも作者は直接話法の効果を充分心得ての上の表現と思われるのである。

堀辰雄の文章には、その材料の新古を問わず、好んで長文を用いて作中の人物の心理の隅々を残る所なく描き出そうと努めているのが、著しい特徴と言ふべきであらう。ここにはわずかにその一端を眺めてみたに過ぎないのである。

四

堀辰雄は西欧文学を好み、読書の範囲もその方面に傾いていたようであり、晩年折口信夫の古代研究などをも愛読し、奈良や京都の古都を巡遊するに及んで、自らの心のふるさと、古典の世界にも親しもうとする態度を見せていたが、谷崎潤一郎とか、特に彼の敬愛した川端康成に見えるような、古典的な一大優篇を世に贈ることのできなかつたのは、作者の早世と共に如何にも惜しいことであつた。しかし彼の作品にはその西欧的な指向にもかかわらず又よく古典の伝統に棹したものも見受けられて、とかく現代の文学に古典との断絶がその特徴の如くあげつらわれるようだけれども、絶対の断絶などはないのであつて、表面上いかにも西洋臭の深く感ぜられる作においてさえも、猶木の下隠れを脈々として人知れず流れている忘れ水の如く、長い伝統の影はぬぐうべくもないのである。まして堀辰雄は国文出身の作家であり、彼のその基礎的な栄養源は之を否定すべくもなく、各々の作品が最もよく之を証しているものと言へるであらう。しかも彼が死を常に意識し、好んで取材の範囲をそこに求め、繰返しそれを描いているに拘らず、之を怖れたり避けたりする態度を採らず、死と同居することによつて、之を楽しみ人生の伴侶として描きつづけていることは、サナトリウムに於ける許婚との生活を、「風変りな愛の生活」（風立ちぬ）と呼んでいる所にも、之を看取することができるであらう。或いはその小説の名に「風立ちぬ」と言つたのは、作中にも何度も之を引用した「風立ちぬ、いざ生きめやも」なるポール・バーレリーの詩句の一節ではあるが、又よく死と背中合せ

の生活において、死との背中合せであればあるほど、かえつて生の喜び、愛の生活を歌い上げずにはおられない作者の心意気を見るべきである。

しかもその表現形式には好んで長文を採用し、それによつて作中人物の複雑多岐な心の隈々を余す所なく描出するのに甚だ効果を収めている。長文は一口では言い現せない複雑な気持を、あちらも描きこちらにも写す事によつて微妙な心の動きのまにまに之を巧みにキャッチすることが出来るのである。

そこには簡単なことしか敘述することのできない短文の靨いえない妙趣がある。もとより簡勁な趣雄莊な場面を描き出すのには適しないけれども、尽きようとして、尽きることもない女性の繰り言にも似た、綿々の情を敘すのに、最も適した文体であることの、「かげろふの日記」その他に好例のあることは、さきに些か詳述した所である。とかく長文を看板とする王朝の物語に取材し、同じ場面を描くに当つても、堀辰雄が物語に句切のある所をもそれぞれしつかりとその前後を結び付けずにはおかれない所に、特に彼の得意の手法の著しい顕現を認めずにはおられないのである。

堀辰雄の表現を論ずるにあたつて、些か彼の好みの長文のよつて來たる所を中心として、その他表現上の特色の二三を眺めてみようとした所以である。

註一、解釈昭和四十四年六月号「掌の小説の表現。」フェリス女学院大学研究紀要第四号（昭和四十四年三月刊）「文学と表現——伊豆の踊子をめぐつて——。」玉藻第五号（昭和四十四年五月刊）「古都鑑賞」などの拙稿を参照。

註二、岡田喜秋氏「堀文学の背景」（近代文学鑑賞講座第十四卷堀辰雄所収）を参照。

註三、日本古典全書「蜻蛉日記」に拠る。

註四、同 上「更級日記」に拠る。

付記、引用の堀辰雄の文章に、新旧の仮名遣の用いられているのは、テキストの相違によるものである。